155 156 対策（官吏登用試験）にも及第し、
政においても、料理のとき小魚を煮るのにそうするように、いたずらに効果をあせって施策を加えかき回すようなことはしなかった。
157 158 159 160 （八七〇、貞観十二年）文章得業生の試を受け、対策及第した。
その後（八八六、仁和二年）南海讃岐の国司となって任地に下り、讃州の多くの町や村を治めた。
こうして私は父祖以来の学問を受け継ぎ儒家の人々の間に高く聳え立っている。
讃州の国主として州を治めた功績は式部省の役人もよく調べて知っている。

【十七段】

161 162 163 164 165 166 167 168 輝かしい栄誉は私の身を明るくかがやかすことになった。
帯びた玉珮は争って輝き、身にまとわすことになった。
高官への栄進とともに責任は重くなり、ずしりと身に感じた。
（その一方で）身辺の危険は増大し、万仞の淵を臨むようなものだった。
人々が仰ぎ見るような地位、（万人が仰望の）右大臣右大将を兼務したのを、
（それを見て）皆ことごとく言った。「あなたは功績も才能も欠く人物だから職を辞退したら」と。
衣服を仕立てることを試みては、あでやかな絹織物を損なうことを、ひたすら恐れるように（天皇を補佐するに当たっては、天皇の権威を損なうことのないように注意に注意した）。
鉛刀（なまくら刀）を手にしたところで、役には立たないだろうから、めったなことをしないように用心に用心をして（国政に参与してきた）。